



トカゲの庭園

内野月化

Gekka Uchino

RB

レジーナ文庫





ルーテシア

小国リリアージュの
王女で、ラルフガルド
に嫁ぐ。

ディラン

ルシュターナ王国国王。
エドウィンと
ラルフガルドの父親。

ラルフガルド

エドウィンの兄で、
ルシュターナ王国次期国王。

バード

エドウィンの執事。
いつも笑顔で物腰は
穏やかだが、わりと腹黒。

マティルタ

エドナの薬屋「ガフの店」を
営む老婆。

レクザス

赤褐色の鱗を持つ竜の子ども。
エドナの森に住む。

登場人物 紹介

エドウィン

26歳。ルシュターナ王国の
第二王子。
トカゲの半身のため、
エドナ城に幽閉されている。

アイナ

22歳。二回の結婚を
経験した没落貴族の娘。
“トカゲの王子様”と三度目の
結婚をすることに。

「あたっ——」

揺れる馬車の天井に思い切り頭を打ちつけ、アイナ・ルーウエンは再び溜息をついた。王都を出発してから七日目。馬車に押し込められているアイナのイライラは、ピークに達している。

そして日を追うごとに道が悪くなっていき、頭を打ち付ける回数も増えていた。仕方ないので、ふかふかのクッションをひとつ持ち上げ頭の上にのせると、それはちょうどよい緩衝材になった。

馬車から見える外の景色は、華やかな街でもなければ、キラキラと輝く湖でもない。ただひたすらなだらかな丘と畑。たまに、群れてのんびりと草を食む家畜の姿もある。それも旅の初めこそは珍しかったが、もういい加減飽きた。うんざりするほど同じ風景なのだ。

1 三度目の結婚

収獲の時期も終わり、冬の気配に覆われているこの世界は見事に色がついていなかった。

先日二十二歳を迎えたばかりのアイナは、没落貴族ルーウェン家の長女だ。

没落している実家を守りたてるとは、より身分の高い、もしくは裕福な男性を伴侶とするのが、一番手っ取り早い方法である。アイナは、自分にそれを実現するだけの器量があることは理解していた。父親譲りの濃いブラウンの髪と深緑色の瞳も、母親譲りの白い肌も、誰もが褒めてくれるものだった。だから十七歳で裕福な家の男との結婚話があつた時には、自分を高く売るチャンスだと思つたぐらいだ。

結局のところ、玉の輿を狙つた結婚は二回とも夫が早くに亡くなる、という結果で終わった。打ちのめされたアイナにとつて最悪だったのは、「アイナは二人の夫を死に追いやつた毒婦である」という根も葉もない噂が広がつたことである。王都に住む人々は面白半分に噂を口にしたが、これによつてアイナは城で働くという道も断たれてしまつた。王宮に仕えるのは貴族の娘たちであることが多かつたが、さすがに毒婦じゃ城の門もくぐらせてはもらえない。不貞腐れて家に閉じ籠る生活だった。

そして今、三度目の結婚のために、この退屈な馬車に乗つて北の地に向かつている。

不意にノックされ、アイナはだらしなく伸ばしていた足を急いでしまつて窓を開けた。王都からずつと先導していた騎士だ。

「エドナの街に入りました。城はあの丘の上です！」

馬を器用に操りながら丘を指さして、車輪の立てる音に負けないぐらいの大声で教えてくれる。

「見えないわよー！」

こちらを負けじと叫ぶアイナに対して、「舌を嚙まないように気を付けてくださいよ」と騎士は人懐っこい顔を見せて馬車の前へ進んでいった。

指された方をじつと見つめる。低い丘の上はまだ城は見えなかったが、その周りには黒い森が果てしなく続き、さらにその奥に国境となる山々が連なっているのはうっすらと確認できた。

日が落ち始めたころ、三人の騎士に先導された豪華な馬車はそう大きくはない街を抜け、緩やかな坂を上る。レンガを積み上げたアーチ状の門と、そこから左右に延びる高い壁が城の敷地に入つたことを告げていた。

そして馬が止まつた。

とにかく車輪と馬の蹄の音がやかましく鳴り響き、ガタンガタンと揺れ続け、身体

あちこちを打ち付ける日々が終わったのだ。アイナは心の底からほっとした。

嬉しさのあまりアイナが勢いをつけて開けた扉に、騎士の一人がぶつかった。どうやら彼は紳士として恭しく馬車の扉を開けようとしてくれたらしい。騎士に慌てて謝り、小さく溜息をついた。がさつな自分が恥ずかしい。貴族とは名ばかりで、貧しく人を雇えない家では、身の回りのことはすべて自分でやってきた。例えば掃除の際には、両手に荷物を抱えながら足でドアを開けたりもした。

母はそんな彼女を見て「外では猫を被っていないさいよ」と釘を刺すことを忘れなかったが、多分それは無理なのだと、最近なんでも諦めがちなアイナは思った。

馬車を降りて、目の前の建物を眺める。正面の玄関まで石畳が敷かれている。その先には大きな木製の扉。建物の壁は古い灰色の石でできており重苦しい雰囲気醸し出していて、城というよりは修道院や教会のようだ。あまりにもこじんまりとした佇まいだったので、ここに身分の高い人が住んでいるとは想像できなかった。

王都にある城は絢爛豪華の一言に尽きる。それとは対照的なこの寒々とした薄暗い建物は、なんとなく今の自分そのもののように思えて、アイナは肩を落とした。

三度目の結婚について、今度ばかりは両親も、断つても良いのだと言ってくれた。だが、タダ飯食らいの出戻り娘を置いておけるほどルーウエン家に余裕があるわけではな

い。そのことはアイナも重々承知している。そして、嫁ぎ先が王都から遠く離れた辺境の地であることも、その時のアイナにとっては良い事のように感じられた。逃げだと言われればそうなのだろう。しかし、口さがない街の人たちと戦う気力はもはやなかった。どうせあととは出家ぐらいしか道がないのだ。どちらでも大して変わらないように思う。アイナは、化け物として王から遺棄され、この辺境の地で幽閉されているというルシュターナ王国第二王子のもとへ嫁ぐことを決めたのだ。

2 トカゲの王子様

突然、なんの音もなく城の扉が開いた。

「アイナ・ルーウエン様、お待ちしておりました」

背の高いロマンズグレーがにこやかな表情で立っている。この古い建物にはびつたりすぎる人が出てきて、アイナは思わず見とれてしまった。自分の父よりも少し年上と思われる、柔和な顔の男だ。

「執事のバード・アルシスと申します。ようこそ、エドナ城へ」

「初めまして。アイナ・ルーウエンです。よろしくお願いします」

最初が肝心だ。緊張で頬を引き攣^つらせないように気をつけながら淑女の笑顔で挨拶を返した。

「あの、何か？」

ふと、バードが不思議そうな顔をしているのに気がついた。

「……お付きの侍女はいらっしゃらないのですか？」

アイナはああ、と声を漏らす。

「残念ながら、侍女を持てるほどの生活ではありませんでしたので」

本当のことだ。ここで見栄を張っても仕方がない。

「ではお一人で？」

驚いたように言うバードに対し、今度はアイナが困惑した。

「あ、はい。でも、王都から騎士が三人ずっと付いていましたので、一人というわけは……」

後ろを振り向くと、その騎士たちが多くはない荷物を馬車から下ろしているのが見える。

そしてバードの問いの意味がようやく分かり、アイナは慌てて言葉を繋げた。

「あ、大丈夫です。私、一人で自分の身の回りのことはできますから！」

裕福な貴族の娘なら、着替えから風呂まで自分で何かをやることはないのも、輿^{こし}入れの際も侍女を連れてくる。だがもちろんアイナはそんな身ではない。「なんならあなたのシャツも洗いますがなにか？」ぐらいの暮らしぶりなのだ。

バードは、そんなアイナの言葉を受けて笑顔になった。

「それはようございました。この城には主と私^{あるし}しかおりません。なかなか行き届いたお世話は難しいものですから、失礼も多いかと思えます」

要は自分のことは自分で面倒見てね、ということか。まさかこの執事に着替えを手伝わせるわけにはいかないでしょうしね、とアイナは神妙に頷いた。

バードに招かれ扉をくぐると玄關はとても広く、天井は高い吹き抜けとなっていた。壁の高い位置には色のついたガラスが嵌^はめ込まれ、そこから夕日が差し込み明るい空間を演出している。

予想外の光景に、「綺麗……」とつぶやいたアイナは、そのまま少し視線を落とし、二階へ通じる正面階段の途中に男の姿を見つけた。

表情も無くアイナをまっすぐに見ている。少し長い黒髪が彼の顔の輪郭を覆っていて、首から下は長い灰色のローブで隠れていた。細身ではあるが肩幅はしっかりとあるので、

身体つきは良いのかもしれない。右手を階段の手摺の上に置いている。そして反対側に垂れた彼の左手に目を奪われた。

——これがトカゲの王子様。

思わずアイナは息を呑む。

ローブの袖からつき出ている左の甲から指先までが見えた。

その皮膚は明るい橙色^{オレンジ}をして鱗^{うろこ}に覆われていて、反射する夕日に染まり鈍く光っていた。

アイナの手の二倍はありそうな甲は、骨ばってゴツゴツしている。そこにももれなく大きな鱗^{かきづめ}がびつしりと生えていた。伸びる五本の指の先は、鎌^みと見紛^{まが}うほど太く尖^{とが}っている鉤爪だ。おそらく、あの焼けただれたような色の皮膚は、目の前の人——果たして人なのか？——が着ているローブの下の身体にも続いているのだろう。

ふと、王宮の門の上に飾つてある、鋭い爪を持つ竜の石像を思い出した。それは架空の動物で物語でしか聞いたことがないものだ。

たしか、神様に退治された竜が城の門番になったお話だっけ、とあやふやな記憶を辿る。

アイナはその場に立ち尽くしたまま相手の左手を見つめていたが、目を上げて男の顔を見た。

黒い瞳の視線とぶつかる。

……ああ、人の目だ。

そう感じたら、なぜか安心した。

アイナは男と視線を合わせたまま微笑む。

「アイナ・ルーウエンと申します。王都より参りました。よろしく願ひいたします」スカートをつまみ少し頭を下げて、淑女の礼をとる。

「エドウィン・シーカー・ルシユターナだ。客人としてお迎えします。どうぞごゆっくり」彼が喋ったこと自体が、なにかそれだけで神秘的な気がした。低くもはっきりと響く声が綺麗だと思ったが、それよりも彼の発した言葉に引っかかる。

客？ 今、客人って言った？ 妻じゃなく？

顔を上げ、ぽかんと口を開けたままのアイナを置いて、城の主であるエドウィンはさつさと二階へ消えてしまった。

その場で固まっていると、執事のバードが、「お部屋へご案内します」と声を掛けてきた。

そのまま連れられて一階の右奥へと進み、立派な扉の前に辿り着く。扉を開ければ、柔らかな白色の壁が眩しく目に入る。中には大きな暖炉が設えられていた。

広いバルコニーが庭へと続いていて、窓には刺繍で縁取られた重厚感のある濃緑色のカーテンが掛けられている。奥には天蓋付きのベッドが見えた。

「可愛い部屋！」

自分のために用意された部屋に、気持ちが一気に上がる。その様子を見ていたバードが、満足そうな笑みを浮かべた。

「アイナ様、私のことはどうぞバードとお呼びくださいませ」

「……ファーストネームで？」

「この城では皆、そのように呼びます。エドナでは姓のない者も多いのですよ」

姓を持たないのは、農民や職人など裕福ではない者たちや流れ者だけだ。ということは、エドナは農民や職人が多い、田舎の地であると言える。

「そういう土地にアイナ様はおいでになったのです」

少し憐れむような目をするのは、王都育ちの小娘の出方を見たかったからなのかもしれない。

この執事は一筋縄ではいかない人なのだろうな、と思った。

「バードさん、郷に入っては郷に従えって言いますものね」

彼を名で呼んだ。それがルールなら従うまでだ。そしてふと、さつき顔を合わせた人の名前の呼び方も聞いてみた。

「あ、それはあの……エドウィン様も一緒ですか？」

「もちろんでございますよ。主も名前で呼んでいたいて構いません」

「……不敬罪になるかと思いました」

「エドウィン様はこの地で育っております。王都のルールなど知ったことではございませんし、王族と思われるくもありませんでしょう」

バードの声は低く、不遇の主を悲しんでいるようでもある。アイナへ説くようでもあった。

それでは、とバードは退出しようとしたが、ふと付け足す。

「城の中では自由にお過ごしください。主のお客様ですから」

その言葉を受けてバードへ目をやると、彼は無表情のままアイナを見つめ返してくる。「いっお帰りになっても構わないということです」

瞬間、アイナの心に寒い風が一気に吹き込んだ気がした。

「バードさん。そ・れ・は、私を迎えたくない、ということですか？」

思わず嘸みつくように聞き返したアイナに、「違います」と即座にバードは答える。

「エドウィン様は、ご覧になったように半身が変わっておりますので、それを見た女性はずぐにお帰りになります。引き留めるつもりは無いということです。でございます」

しれつと言うバードの顔を、小首を傾げて眺めながらアイナは考える。

帰るということは、また馬車に揺られて頭をぶつける日々が続くのだ。それは勘弁して欲しかった。

大体、王都に戻ったところで帰る場所なんてもう無いのだ。

王子だけど化け物トカゲに興入こいれする、ということに自分も納得したはずで。

何よりもちゃんと言葉が通じた。それに、あの王子の顔はなかなか良いと思う。

だからアイナはバードを見上げて、「しばらくお世話になります」と頭を下げた。

「……本気ですか？」

それは予想外だったのか、バードは小さくつぶやいたまま、固まっていた。だがアイナが向ける視線に気づき慌わづろて顔を取り繕う。

「アイナ様、お夕食はどうなさいますか？ お部屋でお取りになりますか？」

「できれば一緒に。客人として」

その瞬間、アイナはこの澄ました執事が破顔一笑するところを見た。

「畏かしこまりました。どうぞアイナ様が長く滞在していただけますことを」

アイナを部屋へ押し込んだバードは、浮足立つのを自覚しながらエドウィンの部屋へと向かう。

あの日、一体誰がこの状況を想像できただろうか。

それは一か月前のことだ。突然王宮から書簡が届いた。珍しいこともあるものだと思味たつぷりに笑いながら封を開けて、そしてバードは固まった。あまりのことに、主あるじであるエドウィンが不審そうな顔をして見つめている事にもしばらく気づかなかったくらいだ。

「どうした？ 親戚でも死んだのか？」

「……いえ。エドウィン様のご結婚されるそうです」

今度はエドウィンが固まる番だった。

書簡には、妻となる者の名前と、その家の由来がつつらと書かれていた。そして付け足しに、結婚歴が二回あると。たったそれだけだ。そして封筒に押されたルシユターナ王国の国印が、王宮からの命令であることを示していた。

「……で、いつ来るんだ？」

右の頬を引き攣らせながらエドウィンが聞くが、答えたくても書簡には書いていなかった。

しばらく二人の間には沈黙が流れ、どちらからともなく溜息が漏れる。そうしてエドウィンは、「帰せばいいだろう」と投げ遣りに言った。

過去にも一度、訪れてすぐに回れ右とばかりに去った女性がいた。まだ幼い面影のあつたその人のように帰ってもらえばよいと、エドウィンは言う。しかしすぐ帰るにしても、顔を合わせればエドウィンの姿を見て心ない言葉を口にするだろう。一応は主に献身的な執事であるバードにとつて、エドウィンが会つて間もない女性から辛辣な罵声を浴びせられるのは辛かった。

それから毎日、いつ来るともわからない訪問者のために部屋を掃除しながら、バードの頭の中では書簡を寄こした王宮に対する怒りが渦巻いていた。

生まれたその日から会つてもいない息子に、なにを今更。そのことがどんなにエドウィンを苦しめているのか分かるはずもない。そしてエドウィンの母であつた王妃がどんなに悲しみにくれていたのかも。そこに二度も結婚した女を送つてくるとは！

「は！」

バードは吐き出すようにイライラと声を上げる。王に対して呪詛の言葉を洩らしていることに自分で気づいた。これが王宮の中にいたら斬首ものだろうが、幸いにも王都からはるか離れた北の辺境の地だ。王への悪態が次々とバードの口から出てきていた。

二度の結婚と聞いて、バードもエドウィンも、毎朝城へ通ってくる料理人のマリアンヌを思い浮かべていた。七人の子を産み育てた、気風が良く、大きな身体を震わせて笑う中年の女。ほとんど女性と接点がない二人は、それぐらいしか思い浮かばなかったただけだ。

『まさか子連れで来るんじゃないだろうな』

エドウィンもバードも同じことを想像したが、声に出せばその通りになりそうで、二人ともその考えは頭の片隅に置いておくだけにした。

収穫の時期が過ぎても客は現れず、「もう逃げ出したのだろう」とエドウィンは胸を撫で下ろし、バードは迎えの準備をいつまで続けなければならないのかと落ち込み始めた時、アイナはやって来たのだ。

ノックへの返事がいかに遅く感じられることか。主の声がした瞬間にバードは扉を強く押した。

「アイナ様をお部屋へご案内いたしました」

「あ？ ……帰らなかったのか？」

振り返ってエドウィンが眉根を寄せる。

「はい。お食事も一緒にとのことですよ」

そう告げれば、彼は眉間の皺もそのままに何度も目を瞬かせた。確かに驚くべきことだ。

「どんな時でも女性を喜ばせるのは男の務めですぞ。頑張ってください」

エドウィンは、なにか不気味なものでも見るかのような視線をバードに送った。

「まずは花でも贈りますか？ 女性はお好きですからね」

「こんな時期に花なんて咲いてないだろ！」

エドウィンが目を丸くして叫ぶ。そして溜息をついた。

「バード、お前は楽しそうだな」

「おや、エドウィン様は楽しくないのですか？」

そう聞き返しながら感情の読めない笑みを浮かべるバードを見て、エドウィンは心底呆れたように言った。

「楽しいはずないだろ。どうせすぐに帰ると言い出すぞ」

「……さて、それはどうでしょうかねえ？」

あの様子から見ると、アイナは怯えて逃げ出すタイプではなさそうだ。

なんとという物好きさな、そして、若さの溢れる美しい娘――

「とりあえず、私は夕食の準備をして参ります」

まったく素直ではない主の部屋をさっさと退出し、バードは足取りも軽く台所へ向かった。

アイナの住んでいた王都では、エドウィンは『トカゲの王子様』と呼ばれていた。

「トカゲが服を着ているんだってさー」と、子どもたちは話していたし、アイナだって似たようなものしか想像できなかった。そんなところに嫁に行く、と返事をした自分かなりのお馬鹿さんだが、さすがに繁栄を誇る強大な国の王子が、デブプリとした身体と尖った瞳孔を持つトカゲそのものだとは思っていなかったのだ。

そもそも現国王と元王妃は美男美女と評判だったわけで、れっきとした人間だ。であるからには生まれてくる者も人間だろう。街の大人たちが話す、王妃が愛人の子を身籠つてしまい、そのことがばれたため王の怒りを買って幽閉された、という説の方がまだ信用できた。

でも、子どもたちが言っていた『トカゲの王子様』の方が当たっているじゃない、と初めての夕食の席で向かいに座った男を見てアイナは思う。

改めて近くで見ると、エドウィンは整った顔立ちをしていた。サラサラと流れる黒い髪は、同じく黒い瞳と良く似合う。さすが王子様だ。辺境の地で引き籠^{こも}つていてもそういうもののなのおね、とアイナは変なところで納得した。しかし、左の頬から首にかけて赤みのある橙色をした鱗^{うろこ}の皮膚が続いているのも見えて、さすがに怖くてじつくりと眺めることができない。

エドウィンの方は不機嫌というわけでもなく、面白そうにアイナを見ていた。

料理は通いでマリアンヌという街の女性が朝だけやってきて、仕込むのだという。

彼女の料理はシンプルながらも外れがないというのが城の住人の評価で、今日の「鳥肉と根野菜のポトフ」はアイナも十分に同意できる。サラダとして出された野菜も新鮮だ。

「おいしい」

素直にそう言ったら、エドウィンが小さくだが笑った。

「本当においしいですよ？」

「それは当然だな」

今度は少し意地悪そうな笑顔だと感じる。バードも嬉しそうに声を掛けてきた。

「こちらの野菜はエドウィン様が庭で育てたものですので、採れたてなのです。お気に召していただいてようございました」

王子自身が農業をするのか、と驚いてエドウィンを見てみると、さらにバードが続ける。

「この城は庭だけはとても広いですよ。エドウィン様が育てた花や木はとても素晴らしいです。残念ながら今は冬ですから、ほとんど花は咲いておりませんがね」

どうやらこの王子の趣味は園芸らしい。ただ一人で庭をすべて手入れできるわけではなく、定期的に庭師もやってくるのだという。北の地エドナはこれから本格的な冬に入るとなると庭も雪に埋もれてしまうらしい。積もる雪を見たことがないアイナにとって、それは本の中だけの憧れの景色だった。

「雪だらけの世界なら、もうすぐ嫌でも見られると思うけど」

「エドウィン様は雪がお好きではないのですか？」

「最初は良いけど、そのうち見飽きるからなあ。雪に押し潰されないように庭木の保護をするのが大変だし」

そういうものなのか、とアイナは首を傾げる。なんだかもったいない。

「でもやっぱり、雪に埋もれる景色は見てみたいですけど」

そう答えたら、エドウィンが驚いたように顔を上げてアイナを見て目を瞬^{またた}いた。バードの方は片眉を上げて、「早く見られるといいですねえ」と笑う。

そして冬の植物はどうだの、野菜の出来がどうだのと話が続き、夕食はお開きとなった。

食事の後片付けを手伝うと言ったアイナとバードの間で少し揉めたけれど、結局、明日から時間に余裕があれば二人で一緒にやるという折衷案で決着した。客だからといってなにもしないわけにはいかないと思ったのだ。

「今日はお疲れでしょうから」とバードに追いやられ、宛がわれた部屋へ行く。

寝転べば、大量のクッションが置かれた天蓋付きの柔らかいベッドが気持ち良い。

エドウィンと話すことは緊張したのだ。仮にも彼は王族だ。でもエドウィンは、わざとなのか辺境育ちのせいなのか、碎けた口調でアイナに話しかけてくれた。玄関で彼の手を見た時は恐ろしいとも思ったが、食事の時に彼は左手を見せず、正直ほっとした。じろじろ見られることが嫌だったのかもしれないが、そういう感情は人間だからこそ持つものだ。

結婚はしなくて済みそうだし、エドウィンは悪い人ではなさそうだ。園芸に精を出す王子様というのはあまり聞いたことがないけれど、あの人とだったら友人になれるかも、とアイナはふふつと笑う。そしてベッドに沈む自分を感じて、アイナは旅の疲れから一気に眠り込んでいった。

3 城の心得こころえ

翌日、アイナは慌てて起きた。ベッドの中があまりにも心地よかったので、起きるのが遅くなってしまった。急いで身支度をして台所へ向かい、息を整えてそっと扉の中を覗く。

そこには亜麻色の髪を後ろで結わえた、大柄な中年の女性がいた。彼女は、ちょうど持ってきた籠かごをどさりと台所脇の机の上に置くところだった。

「あ、あの。マリアンヌさん、おはようございます」

アイナは少しだけ緊張しながら後ろから声を掛けた。驚いて振り返ったマリアンヌのくりつとした丸い目がアイナを捉える。

「……あなたが花嫁さんかい？」

そう聞かれて、慌てて名前と、花嫁ではなく客人であることを伝える。すると彼女はアイナの顔をしげしげと眺めて、それからゲラゲラと腹を抱えて笑い始めた。

なにごとかとアイナは不安になったが、マリアンヌは笑いすぎて目に涙すら浮かべて

いる。

「こんなに綺麗なお嬢さんがこの城に来るなんて思わなかったんだ。エドウィン様もさぞかし驚いただろうねえ」

そう言うやいなや、マリアンヌはブツと吹き出し、またヒーヒーと身体をくの字に折り曲げて笑い始めた。どうやら彼女は笑い上戸らしい。グビリと水をあおって落ち着いたマリアンヌに、ようやくアイナは食事の礼を言うことができた。

すると、マリアンヌは目を輝かせて嬉しそうに微笑む。

「張り合いがないんだよ。エドウィン様もバード様も味は二の次みたいで」

「え？ 二人とも料理を自慢していたけど？」

アイナは首を傾げた。ただ、あの二人の男が料理を褒める姿は確かに想像しにくい。

そしてマリアンヌは、一緒に朝食の準備をするアイナにこの城での心得こころえを教えてくれた。

「エドウィン様はお育ちがアレなので王子様扱いしなくて大丈夫よ。傅かじずかれるタマかい」
彼女はアイナに向けてニヤリと笑う。

ルシュターナ王国の第二王子なんて惨めなもんだ、とマリアンヌは言った。あの姿のために、生まれてからすぐに母である王妃とともにエドナの城に幽閉されて、王子とし

て与えられるものにはなにもなかったらしい。

「でもあの髪と顔立ちだけは、王妃様そのものだねえ」

そうつぶやきながら、マリアンヌは昔を思い出すかのように遠くを見つめていた。

朝食の席で、マリアンヌ特製のオムレツを口に入れたアイナはにへらと相好そうこうを崩す。
シンプルながらも絶妙な塩加減でとてもおいしいのだ。

「……面白い顔してる」

向かいに座るエドウィンが、真面目な顔で言う。その失礼な言い方に、アイナは喉を詰まらせた。だが、真剣な顔をする彼がなんだかおかしくて、吹き出しそうになる。

「うまそうに食べるんだな」

「エドウィン様はおいしくないのですか？ おいしいですよねっ？ ねっ！」

アイナが首を傾げながらにつこりと、だが無理やりに答えを誘導すると、エドウィンはわずかに呆れたように、「……ああ」と頷いた。王妃様そのものとは、こういう綺麗な顔立ちで人を小馬鹿にしたような表情をすることなのかしら？ とアイナは目を瞬またたく。今度は王妃の性格についてマリアンヌに聞いてみようと思った。

食後の紅茶が出てくると、「さて」とエドウィンが切り出してきた。

「この城にも決まり事があるので、すまないけど守って欲しい」
そばにはバードも控えて、にこやかにアイナを見つめている。

変わった主の言う決まり事とやらの若干不安になったものの、この城で世話になるからには従いますとも、とアイナは素直に頷いた。

「まず、君がどこに行こうと自由だ」

「は？ ……はい」

思わぬ初めの一言でなんだか拍子抜けした。

「ただし、門の外には王宮から派遣されている門番がいる。だから君も気をつけて」
「気をつける？」

「そう。俺はこの城の敷地から出ることはできない。王は、生活の保障と引き替えに王妃とその息子に軟禁を命じたんだよ。門番はそれを見張るためのクソ犬どもだ」

およそ王子らしからぬ言葉遣いだ。これならばマリアンヌが苦笑いするのも頷ける。

「えーと、城から出たらどうなるのです？」

「身分の剥奪と城の没収でございますよ」

バードが代わりにしれつと答えた。

「身分はどうでも良いけど、住むところは欲しいよなあ」

エドウィンは笑って言う。

「城の没収って、重すぎじゃないですか？」

思わずアイナは眉を寄せた。城の敷地から一步でも出ると住むところが無くなるなんて、やけに不利な条件だと思う。

「まあねえ。でもこんな身体だからね。形だけの王子だし？」

相変わらずへらりと笑う彼に、アイナも何も言えない。

もし、エドウィンが外に出たら——人々はどういう反応をするだろう。彼に刺さるのは好奇の視線か、恐れ of 言葉か。

自分が王都で過ごしていた間のことを思い出した。人の目を避けて家に閉じ籠^{こも}っていた時は、息苦しくもあったが家族がいてくれた。

エドナ城はエドウィンにとって檻^{おり}だが、同時に彼を守る外壁だ。そこから出なければ傷つくことはない。ここは、生きていくためには必要な場所なのだ。

「バードさんも城からは出られないのですか？」

「いえ、私は問題ありません。ただ、王都には足を踏み入れてはならないと言われているがね」

この人も謎だな、とアイナは紅茶を飲みながらバードにちらりと視線を投げた。

すつとエドウィンが立ち上がる。

これで話は終わったのかと小首を傾げたアイナだったが、彼の方はまだ用があったらしく、座っているアイナのもとへやってきた。エドウィンを仰ぎ見る格好となり、思わず身体がのけぞる。

「俺はこの城の敷地から出られない——」

ニヤリと彼は笑った。その顔にとっても嫌な予感をする。

「……ってことになっているから」

腰をかがめたエドウィンの瞳が、アイナの目と同じ高さに来た。

「たまに抜け出していたとしても、言わないよね？」

「はあ？」

目を丸くして動けなくなるアイナの頭を、エドウィンはにつこり笑ってぐりぐりと撫でる。

「これで共犯な」

あ、巻き込まれた。アイナの顎が外れそうになる。

「それじゃ、出掛けてくる」

右手をひらひらと振り、エドウィンはそのまま食堂から出ていってしまった。

絶句しているアイナに、バードがすまなそうに声を掛ける。

「本当にたまになんですよ。こっそり裏の森に出掛けられるのです」

「だ、大丈夫なんですかそれって！ 門番にもし知れたら！」

「まれに王宮の使者が調べに来ることもあります……」

「えええ!？」

バードはきつちりと腰を折って礼をする。

「その時はご覚悟をお願いします」

……この執事は腹黒い！

アイナは盛大に溜息をついてテーブルに突っ伏した。

その日、エドウィンは夕方になる前にはすでに城に戻っていたらしい。

二人が向かい合って座る目の前には、昨日と同じくおいしそうな夕食が並んでいた。

エドウィンは城を抜け出している時の話は一切しなかった。アイナもぶらぶらと庭を散策しただけだったので、特に報告するようなこともない。静かな食事も息苦しいので、アイナの方から声を掛けた。

「ええつと、エドウィン様はおいくつなんですか？」

「二十六だ」

「お若いんですね」

エドウィンに微妙な顔をされた。もつと年上かと思っていたのだ。見た目からそう思ったのではなく、男性の結婚適齢期をとうに超えているから、今回の無茶な結婚話が出たのだろうかと思像していた。

「失礼な奴だな。君の歳は？」

たしかに今の発言は「老けて見えます」と取られかねないな、と申し訳なく思いつつアイナは答える。

「二十二歳です」

「……その歳で結婚歴が二回もあるのか」

これにはアイナも言葉を詰まらせたが、ここでさらに追い打ちをかけられた。

「どうして別れたんだ？」

言われた瞬間、口に入れた料理の味がしなくなった。

聞かれることは覚悟していたつもりだ。だが、なんの屈託もなく聞かれるとは思わなかった。

「食事の時にお話するような内容ではありませんが……」と、話したくないことを匂

わせるが、エドウィンはそれに気づく様子はない。アイナは気が重くなったが、いずれ分かることだと思い、諦めて言葉を続けた。

「二人とも早くに亡くなったので」

ふーん、とばかりにエドウィンは一拍置いて、少し目を細める。

「どうやって亡くなった？」

とたんに今度は口に入れた料理が砂を嚙んでいるように感じられて、呑み込めなくなった。そのままフォークをゆっくりテーブルの上に置く。食事の際の会話なので言葉を慎重に選びたかった。

「一番目の夫は、結婚式を挙げたその日のうちに、別れられなかった女の人に殺されてしまつて。それで私はあつまり実家に帰されました」

最初の結婚は十七歳の時だった。

相手は裕福な家だったから華やかな結婚式を挙げることができた。アイナの両親はそれはそれは喜んだ。家の繋がりができるわけだから将来は安泰だ。だが、初夜に夫は寝室へやってこなかった。アイナはこれから行われるであろう夫婦となるための『儀式』に不安に駆られながらも、ベッドの上で彼を待っていたというのに。

新婚の夫は愛人の女に詰め寄られ、アイナのいる寝室から近いところで殺されたのだ。

その二年後、両親はまた家にとって好条件の結婚相手を探してきた。
「そして二度目の結婚をすることになりました。相手は侯爵家でしたから両親は喜びました」

相手は四十歳を過ぎていた侯爵だった。侯爵にとっては何番目かの妻ではあったけれど。結婚初日で出戻りとなった身を考えれば、良い条件と言えるのだろうとアイナは思ったが、すぐに後悔と恐怖に襲われることとなった。

「でもあの人は……怖い人で……」

ここまで言うのと、なぜか言葉が出なくなった。体温が一気に下がる感覚がして、目の前が真っ暗になる。

「おい！」

不意に大きな声が聞こえ、びくりと身体を震わせたアイナは、自分がしばらくの間茫然としていたことによく気づいた。ほやけた視線の先にエンドウィンが見え、声の主が彼だったことを理解する。

「……すまなかったな」

なぜかエンドウィンは謝り、そのまま席を立てて食堂を出ていってしまった。静かに扉が閉まる。

「だから言いたくなかったのに」

目だけで彼を見送ったアイナは、しばらくしてつぶやいた。

夕食の片付けをしている途中、隣で皿を拭くバードはちらちらとアイナの方を見ていた。

先ほどの夕食でのアイナの様子は確かに普通ではなかったので、気を使ってくれているのだろう。

わざとらしく、「ふう」と息をついてバードが口を開いた。

「アイナ様、二番目のご結婚相手の名前を覚えていただけませんか？」

「うあ!？」

思わぬ聞き方に、アイナは変な声を出してバードの方を向いた。

「笑顔が怖いですよ、アイナ様」

バードがにっこりと笑みを浮かべて注意する。アイナは動揺を悟られないように、表情を消してバードを見上げた。そして、「アルク・オルタナ侯爵でした」と答える。

「やっぱりですか」

何気ない口調で話すバードに、今度はアイナが驚いた。

「知っているのですか！」

「王宮では評判の悪い一族です。……色々と」

アイナの肩がびくつと跳ね上がった。彼の顔が見られなくなって下を向いた。

バードはアイナに向けていた顔を正面の皿へと戻し、ゆっくりと口を開いた。

「私はエドウィン様のお母様にずっと仕えておりました。王宮にいる時からですね。エドウィン様がお生まれになり、あのお姿であったことで、王は王妃様をひどく責めました」
バードの言葉の中に国王への怒りが感じられるのは、王妃のことを思っていることだろう。

「その時にオルタナ侯爵が、——ああ、その時は先代のオルタナ侯爵ですが……王妃様と離縁したら自分に下賜してくれと」

アイナがはっと顔を上げた。

「……王もオルタナ侯爵の悪行は知っていましたからね。情はあったのでしょうか、離縁はせずにそのままエドウィン様と王妃様をこのエドナに送ったのです」

昔話ですよ、とバードは微笑んで、近くの椅子にアイナを座らせた。アイナは眉を落としたが、それでも笑おうとした。

「毎日が怖くて、あの人が亡くなったと知った時は……私、本当にほっとして嬉しく

て……」

それは他人に言うてはいけない感情だったのかもしれない。

重苦しい言葉が吐き出される中で、バードは努めて平静な口調を保った。

「あなたのせいではないのですよ。辛いことを思い出させてしまいましたね」

その瞬間、アイナの顔はくしゃくしゃになった。声を上げて泣きたくなくて、そんな醜態は見せられないとアイナは必死に耐える。バードも何も言わずにただアイナを見守っていた。

長い沈黙が続き、ようやく気持ちが落ち着いて、アイナはそつと溜息をつく。

バードはそれを合図にしたかのように、紅茶を入れたカップを渡してくれた。その気遣いに嬉しくなって、両手でそれを包み込む。そしてふとバードを見上げた。

「あの、このことはエドウィン様には言わないでくださいね」

「おや、なぜですか？」

不思議そうにバードが首を傾げる。その理由を分かっているわざと聞いているのだろうか。

「……聞いても仕方のない話だと思いますし。それに、また謝られるのも嫌なので」

「すみませんねえ、あのかたにデリカシーが無くて」

「私、エドウィン様とお友達になれるかなと思います。お客様でいる必要もないと思いますし」

それは男には酷なセリフなんですけれどねえ、と小さくつぶやくバードの声が聞こえた。

紅茶を飲み終わり部屋へ戻るアイナを見送り、バードは奥にある勝手口に視線を投げて声を掛けた。

「……だ、そうですよ」

勝手口の扉の後ろから、黒い影が出てきて非難がましく声を出す。

「誰がデリカシーが無い、だ」

「そりや盗み聞きするような人は言われても仕方ありませんねえ。いけません」

「別に、そんなつもりじゃなかった……」

実際そうなのだろう、バードはニコリと笑った。

「私はアイナ様と約束しましたからね。エドウィン様には内緒なのです」

「……分かってるよ」

無然としているエドウィンに、「お休みなさいませ」と言ってバードは台所を後にした。

4 夜の誓い

アイナにとってはもう二度と思い出したくないことだ。

二度目の結婚で、アイナの身体には初夜にして生傷がいくつもできることとなった。初めてのベッドの上では気絶することも許されなかった。気絶すれば水を掛けられるか殴られるかで無理やり起こされた。アイナが破瓜^{はか}し、血と侯爵の体液が混じりあう。それが彼女の内腿を伝い流れるのを見て侯爵の嗜好^{しこう}に火が付いた。アイナの首を締めながら、じわりと下半身を打ち付ける。優しさなどまるでない行為が続き、口の中に自分の血の味が広がったりもした。

それから毎日、アイナにとっては恐怖でしかない夜が続いた。

しかし五日目の夜、侯爵はいつものようにアイナに押し掛かっ^のていて、行為の途中そのまま息絶えた。それが腹上死^{はらみじ}というものであることも、侯爵のあまりにも質^{たち}の悪い性癖^{せうへき}がある筋では有名であることも、葬儀の後に屋敷を追い出されてからアイナは知った。妻という立場などにもなかったものにされ、侯爵の何番目かの妻やら子やらが出て

きたようだが、アイナはもう関わりたくないと思ふ目も塞いでやり過ごしてきた。それからしばらくの間、アイナの心は死んだも同然の状態だった。ようやく自分が笑えるようになったことを実感できたのは、身体の傷も癒えて三か月ほど経ってからだった。

昔のことだ、と一言で片づけるには、まだアイナには時間が足りない気がした。そして過去に引きずられたままの自分がなんだか情けない。バードに、「あなたは悪くない」と言われたことは、アイナにとつて思つてもいない救いだったけれど、同時にこうやって悪夢を思い出すことは、やはりしんどかった。

ベッドの上に倒れ込んで鬱々と考えてしまつて、結局眠れたのは明け方になつてからだ。

朝食に出てこなかったアイナを心配して部屋にバードがやつてきたが、扉を開けたアイナの顔を見た彼は、「ひっ」と小さく息を呑んだ。

失礼な人だな、とむくれつつも、確かに今の自分は酷い顔をしているとアイナは思う。食事はいつでも用意してありますよ、とバードは言い残して退出していった。

窓の外はとくに明るくなつていて、それがアイナをほっとさせる。

これなら眠れるだろうと再びベッドにもぐつて目を瞑り、次に目を覚ました時には、

昼はとうに過ぎていた。

のろのろとベッドから這い出し、身支度を整えて食堂へ向かった。

そこにはエドウィンもバードもいない。湯を沸かして茶を淹れ、パンと一緒に胃に流し込む。

窓からは明るい光が優しく差し込んでいるが、誰の気配もない無音の部屋が寂しかった。

今日はこれからをどう過ごせば良いのかと迷つたが、とりあえず庭に出てみることにした。

玄関を出て庭へ回ると、冬の木々は葉を落としたものが多く、ただセピア色の景色が広がっていた。木によつては添え木をされたり、筵を巻かれたりして、これもエドウィンがやったのだろうかとはんやり考えた。濃い緑色の葉を付けた低木もあり、そのうちのいくつかは赤い花をつけていて、これが山茶花という名前であることを思い出す。そうやってただ庭木を眺めていると、ドタドタと後ろから足音が近づいてきて、アイナは身構えた。

昨日の会話のこともありエドウィンとは顔を合わせたくないのだが、同じ敷地にいればどうやっても会つてしまうものなのだろう。逃げ場はないと覚悟して、足音のする方

を振り返った。

するとそこには赤みがかった栗色の髪、背の高い男が立っていた。体格も良い。エドウィンは細く見えるが、この男は屈強という言葉がぴったりだ。

「誰だ、あんた」

自分の言いたいセリフを相手に取られてしまった。思わずアイナもぼかんと口を開ける。

「……ああ、そうか」

しばらく呆然と顔を見合わせていた二人だが、男の方が先に口を開いた。

「エドの……花嫁さん？」

男は面白そうに口の端を上げる。エドウィンを愛称で呼ぶからには、彼とは仲が良いのだろう。目の前の女が花嫁ではないことを知っている様子で、わざとらしく言う。

ムツとしながらも淑女の礼をしてアイナは名を告げた。だが目の前の男はそんな礼をするアイナにびつくりしたようで、急に挙動不審になった。

「あ、つと……あんた貴族の娘さんなんだよな」

「え？」

「俺、身分の高い人には縁がないから、こういう時の礼とか知らなくてよ」

身分の高い人って……とアイナは呆れる。じゃあエドウィンはどうなるのだ。彼はこの国の第二王子だろうに。本来ならアイナだってエドウィンと口をきけるような立場ではないのだ。

「それなら、エドウィン様はどうなるのです？」

不思議に思っただけで聞くアイナに、男は即答する。

「あいつは別だな」

「はあ……」

「こんなところにいりゃ、王子様とか関係なくね？」

この男の判断基準がいまいち分からなかったが、言いたいことは何となく通じた。

「それを言うなら私もそうですね」

アイナの返答に、今度は男が大笑いする。

「あんたも貴族らしくないんだなあ。あ、そうだった。俺の名はデユース」

名乗るのを忘れていたと苦笑いしながら、さらに庭師だと付け足してアイナに握手を求めた。

デユースはケラケラと笑いながら、後からやってきたホルスという名の年配の男を紹介した。

デュースの笑いっぷりにアイナは首を傾げながらも、ホルスにも挨拶をする。

「じいちゃん、この人がエドの嫁さんだよ」

デュースの祖父であり、庭師の師匠でもあるというホルスの灰色の目が大きく見開かれ、アイナの手を取って「そうですか、そうですか」とにこやかに笑う。落ち着いた声が耳に優しい。皺のある手で撫でられてアイナは少し照れた。

「気をつけた方がいいぞ」

背後から知った声が聞こえてきて、今度こそ、今日は会いたくないと思った人物がやってきた。

「エドウィン様」

アイナは気まずいまま、彼の名を呼んで振り向いた。

「ホルスは稀代の女たらしだからな」

そんな失礼な言い方をするなんて、と思いホルスを見ると、彼はニヤツと笑ってアイナの甲に口づけた。びっくりするアイナの手を掴まえたまま、ホルスが口の端を上げてエドウィンを見る。

「人妻でなけりや口説くのは構わないだろ？ お若いの」

「……頼むからやめてくれ」

眉を吊り上げたエドウィンを見て、デュースがさらにゲラゲラと笑う。

「じいちゃんにはホントに気をつけた方が良いぜ」

デュースはそう言いながら、いまだアイナを掴んだままのホルスの手を外そうとしていたが、なかなかその手は解けない。ホルスは高齢にもかかわらず、デュースにひけを取らないほどの力と技があるようだ。

アイナが困惑していると、急にホルスの背が伸びた。

「あれ？」と不思議に思っていると、エドウィンのトカゲの左手がホルスの服の襟をつまんで、高く持ち上げていた。ホルスの足が地面から浮く。それにつられてホルスの手がアイナから離れると、今度はずとんと彼を地面に降ろした。

「ほら、冬囲いが間に合わないぞ」

なにこともなかったかのように、エドウィンがホルスを連れて庭の奥へ歩いていく。

「エドも面白いよな」

デュースはこっそりアイナに耳打ちをして、それから二人の後を追って走って行った。一人残されたアイナは、呆気に取られて三人を見送るしかなかった。

そんな庭師たちのおかげで、夕食の時間は会話が弾んだ。

昨日の気まずさを引きずらずに済んでアイナはほっとしたが、エドウィンにとつてもそれは同じだったようだ。今は庭木の冬支度で庭師たちは忙しい。筵じゅうを巻いたり添え木をするので雪や寒さから植物を守るのだと、エドウィンは教えてくれた。

食後にブランドーの香りを付けた紅茶を飲む時も、庭師の話は尽きなかった。

デュースとは幼い頃からの遊び相手だと聞いて納得した。あんなに笑い合える友人がいるからこそ、エドウィンはこの閉ざされた城でも生きていけるのではないかとも思えた。

羨ましかった。

アイナには友人と呼べる者がいなくなっていたことに気づいたのだ。

幼い頃は、泥だらけになって一緒に駆け回る友人がいた。少し大きくなっても、内緒話をしたり一緒に笑い転げる女友達がいた。しかしアイナがさっさと嫁に行き、あつという間に二度も出戻った後には、もう気楽にお喋りできるような友人はいなくなっていたのだ。自分のことに精一杯で、周りに目を向ける余裕がなかったからかもしれない。それはずいぶんと寂しい人生だな、とアイナは自分のことを考えた。

夕食の片付けの後、アイナは部屋に戻ろうと暗く寒い廊下を歩いていた。

「うにゃ！」

玄関前の床がなぜか盛り上がっていて、それに気づかず足を取られてしまった。

倒れかけた瞬間、強い力に引き寄せられ、なんとか踏み留とどまる。

暗い廊下のわずかな灯りに、トカゲの手だけがギラリと輝いて見えた。

「……ああ、エドウィン様」

彼の足につまずき転びそうになったところを、エドウィンが慌てて支えてくれたのだ。せめてもう少し分かりやすい場所で立っていてもらえないかしら、と都合の良いことを考えた。

「どうされたのですか？」

なんで彼はこんな時間に玄関にいるのだろう、とアイナは訝いぶかしんだ。

「出掛けてくる」

「ええ？」

エドウィンはまた城を抜け出す気らしい。さすがにそれはまずいのではないかと「言おうとしたが、エドウィンはそれを察したようだ。」

「夜には門番も来ないと思うけど。多分」

多分ってなんだ、多分って。アイナは溜息をついた。

「アイナは——」

突然右の耳元にエドウィンの声が聞こえ、アイナは思わず、「ふやつ」と声を出す。

「なぜここへ来た？」

「こ、ここへって……」

彼の囁くような声は、思いがけず優しく、なぜか心臓が跳ねる。

「この城は修道院なんかじゃないぞ」

「え……」

「死ぬつもりでここに来たのか？」

瞬間、アイナは声の主を振り仰ぐ。エドウィンの顔の左側が見えたが、黒髪で隠れていて表情が見えない。尖った橙色の皮膚がわずかに覗いていた。

「そ……んな、訳ない……」

視線は彼の横顔から外せない。自分の声が掠れているのが分かった。

「じゃあ笑つてろ」

「……はい？」

エドウィンの言葉に思わず疑問形で返事をしてしまった。

「君に泣かれると、どうすればいいのか分からない」

それは昨夜の夕食の時のアイナの様子を言っているのだろうか。

泣いていたっけ？ いや、泣きそうな顔はしていたのかも。ふつ、とアイナの身体か

ら力が抜けた。

なぜこの城に女が単身でやって来たのか、エドウィンには分かったのだろうか。

本当は捨て鉢になっていたのだ。生きる術が分からなくなっていた。

街の噂からも、人の目からも逃げるのに疲れていた。

それでも自分で死を選ぶわけでもなく、修道院へ向かうわけでもなく。

ただただ現状から逃げたくても、実家から出ることもせず。

だから化け物王子との婚姻話に乗ったのだ。

もしかしたら、化け物が自分を殺してくれるかもしれない。

この四肢を粉々にしてこの世から消してくれるかもしれない。

それを自分は望んでいたのだ、知らず知らずに。

なのに、エドウィンは礼儀を尽くしてアイナを客として迎えた。

たくさんの言葉を交わした。

嬉々としてこの城のことを語った。

彼を慕う友人がいた。

エドウィンは、自分なんかよりよっぽど人間らしく生きている。

そんな彼に、「殺してくれ」と望んでいたのだ。

化け物としてのエドウィンに殺されたいと。

それがどんなに彼を傷付けることなのか、今やっと気づいた。

ごめんなさい、という言葉は出てこなかった。それでは自分の気持ちを伝えるのに足りない気がしたのだ。

「あなたがそれを望むのなら——」

アイナは、ただその横顔を見つめたまま言葉を紡いだ。

「私は泣かないから」

エドウィンはその言葉に驚いてこちらに顔を向ける。

彼の漆黒の瞳がわずかな光を受けて輝いて見えた。それは高貴な宝石のようにきれいだ。アイナは思う。目が合ったが、すぐにエドウィンは横を向き視線を外して俯いた。まるでアイナに見つめられることに怯えるかのように。

ここで謝罪の言葉を告げて、化け物としての彼に救いを求めている事実は、この優

しい人を傷付けてしまうだろう。だから——

アイナはつま先を立てて背伸びをする。

そして、エドウィンの左の頬に——鱗のある肌にとっとキスをした。

息を詰めた彼の気配が伝わってくる。

それはかすめるように触れるものでしかなかったけれど、アイナはこのキスに誓う。

この人を二度と傷付けはしないと。

5 鉤爪の持ち主

エドナに来てから十日目の朝が来た。柔らかな布団の中で目を瞑ったままもぞもぞと身体を動かして、起きようかどうかと思索する。

この数日で、アイナはまたいくつか城の日常を知った。

城の住人は閉じ籠った生活をしているが、たまに訪れる客は拒まないらしい。エドウィンの育てる薬草が目的らしく、客は薬草を受け取り、代金を払うとそそくさと帰っていく。